



FRONTIER NEWS

March 2019

Number 32

ご挨拶

創薬科学フロンティア研究センター長
薬品化学分野 赤路 健一

遅くなりましたが、2018年度の創薬科学フロンティア研究センター活動をまとめたニュースレターをお届けいたします。遅くなりました最も大きな理由は、年度末に文部科学省より届いた連絡によるものです。2019年2月26日に、本学が平成30年度「私立大学研究ブランディング事業」に選定されたとの連絡を受けました。創薬科学フロンティア研究センターは、放射性同位元素研究センターや共同利用機器センターとともに本事業計画に大きく関わっており、これからの研究進展に大きな弾みをつけることができる採択結果でした。本事業に関しましては本ニュースレターでも紹介しておりますので、詳細についてはそちらをご覧ください。また、2018年度は、2015年度採択の私立大学戦略的基盤形成支援事業である研究拠点形成事業「新規分子標的治療薬創製に向けた大学発ベンチャー基盤の確立（5年間）」の総まとめ研究活動が進められています。本事業活動の一端につきましても本フロンティアニュースに掲載いたしました。あわせて2018年8月6日に、本センターの主催事業として創薬科学フロンティアセンター特別講演会を開催いたしました。カンザス州立大学化学科教授のDuy H. Hua先生に「Mechanism and Counteraction of Alzheimer's Disease in Mouse Models」と題してご講演いただき、多くの教職員・大学院生・学部生に加え他大学の教職員の参加も得て盛会となりました。この講演会内容についても本ニュースレターに紹介記事を掲載いたしました。

皆様のご支援により今年度もこのような新たな展開を目指したセンター関連講演会を開催することができ、創薬科学フロンティアセンター設立から現在まで途切れることなく少なくとも年1回のシンポジウムあるいは講演会の開催を続けることができました。これから

も新しい切り口でのシンポジウム開催をぜひ継続したいと考えております。

創薬科学フロンティア研究センター構成員に関する人事異動について紹介させていただきます。本年度は、新任教員として薬化学分野に古田 巧教授が2018年4月1日付で着任されました。また、2018年7月1日には同分野に浜田翔平助教が着任され、お二人の先生が新生薬化学分野の研究活動を活発に進められておられます。また、2019年1月1日には共同利用機器センターに安東友繁助教が着任され、質量分析関連機器の管理・運営とともに研究活動を開始されておられます。新任の先生方のこれからのますますのご発展を大いに期待しております。

なお、2019年3月末日を持ちまして私はセンター長を退任し、2019年度から創薬科学フロンティア研究センター長に薬品製造学分野教授の山下正行先生が就任されます。新しい発想のもとセンターでの研究活動をますます活発にさせていただけるものと確信しております。これまでと変わらぬご支援を賜ります様よろしくお願い申し上げます。以上、2018年度創薬科学フロンティア研究センター活動のご報告を兼ねましてのご挨拶とさせていただきます。

文部科学省私立大学戦略的基盤研究形成支援事業
「新規分子標的治療薬創製に向けた大学発ベンチャー基盤の確立」
Annual Meeting 2018

日時：2018年9月13日（木）13：50～17：30

場所：京都薬科大学 愛学ホール

参加者数：175名（職員45名、大学院生16名、学部生111名、その他（卒業生）3名）

本私立大学戦略的基盤研究形成支援事業プロジェクト「新規分子標的治療薬創製に向けた大学発ベンチャー

「一基盤の確立」では、9分野1センターから13名、広域大学知的財産アドバイザー1名と学外の3施設から3名、計17名が参画している。本プロジェクト発足後3年が経つが、この間進捗会議を年2回行い議論を重ね、新規分子標的治療薬創薬に向けた4つの共同研究プロジェクトを昨年度に立ち上げた。2018年9月13日に開催されたAnnual Meeting-2018では、4つのプロジェクトの進捗報告(口頭発表)、個々の参画研究者の研究発表(ポスター発表)と特別講演を行った。本学学部生、大学院生、教職員および卒業生、併せて175名が参加した。

開会に際して、後藤直正学長から発足当初からの本プロジェクトの使命：①学内共同研究体制の確立、②若手研究者の育成、③研究成果を再確認のご挨拶をいただいた。引き続き、本プロジェクトの研究代表者である芦原から、今までの経過の概要が説明された。



後藤 直正 学長

引き続き、共同研究の進捗報告として、以下の4演題の発表がなされた。どの口頭発表においてもそれぞれ活質な質疑応答、議論がなされた。

1. マウス脳腫瘍肝細胞を用いたアセトゲニン誘導体がん治療薬の開発 (アセトゲニン班)
2. Wnt/ β -catenin 経路阻害薬の創製 (Wnt 班)
3. クマリン系がん転移抑制薬の創製 (転移班)
4. A β 産生抑制および凝集阻害薬の創製 (BACE 班)

それぞれの進捗に差はあるものの、どのグループも着実に成果をあげており、マウスモデルでの検討に進

アセトゲニン班
小島直人先生(左)、中田 晋先生(右) Wnt班
服部恭尚先生(左)、若林亮介君(右)



転移班
杉山雄輝君(左)、長谷川功紀先生(右)



BACE班
小林数也先生



んでおり、臨床試験での評価基準を検討しているグループや特許申請を計画推進しているグループもあった。

次にPoster Viewingとして、各参画研究者の個々の研究発表が行われた。今年は18演題のエントリーがあり、ポスター会場とした愛学館A33講義室に多くの学生や教員が発表に参加し、新規分子標的治療薬創薬研究の質疑応答を行った。

Poster Viewing



次に、本学OBである生命科学インスティテュート代表取締役社長の木曾誠一先生から特別講演「Muse細胞による修復医療の可能性 ～生命科学インスティテュートが切り開く次世代医療～」をいただいた。Muse細胞は骨髄間葉系幹



木曾 誠一 先生

細胞由来で、三胚葉への自発的の分化能をゆうする、極めてユニークな多能性幹細胞で、講演では修復医療(再生医療)の実用化を目指したMuse細胞を用いた脳梗塞や心筋梗塞マウスなどへの研究成果をご提示いただいた。

木曾先生は現在の医療保険制度において医療的価値のみならず、医薬品の薬価とのバランスにも考慮する必要があり、製品開発段階から3つのable: “Valuable (アンメットメディカルニーズに合致しているか)”、“Accessible (広く医療に提供でき、適正な価格で、身近な場所で受けられる医療なのか)”、“Sustainable (健全な事業として、医薬品を安定供給でき、将来にわたり提供し続けることができる医療なのか)”を視野に入れ、展開することが重要であることをお話しいただいた。講演後は活発な質疑応答がなされ、新規分子

標的治療薬の開発を視野にいれた本プロジェクトにとって、非常に有意義な特別講演であった。

引き続き、ご参加いただいた外部評価員である京都府立医科大学大学院 医学研究科 分子標的癌予防医学 酒井敏行教授、ならびに京都大学大学院 薬学研究科 薬品合成化学分野 高須清誠教授を代表して、高須教授から本 Annual Meeting のご講評をいただいた。「昨年度より進捗が見られ、京都薬科大学ならではの共同研究体制で研究がなされている。残り1年半でさらなる進捗を期待する。」と、叱咤激励の総評をいただいた。

最後に、合成・相互作用解析グループリーダー 薬品化学分野 赤路健一教授から、本プロジェクトのさらなる進捗、ならびにさらに全学を上げた共同研究を推進すべく邁進する、旨の言葉があり、盛会のうちに、本 Annual Meeting は終了した。

今後も定期的に進捗会議をもち、知財の獲得、上市を目指した分子標的治療薬候補化合物の創製を続け、さらに新たな“知の創造”も目指して本プロジェクトを遂行していく。

文責：芦原英司（研究代表者）



Meeting風景



外部評価委員



赤路 健一 教授

文部科学省私立大学研究ブランディング事業
「受容体特異的画像化技術を基盤とするがん放射線
内用療法 (radiotheranostics) 研究拠点の形成」
キックオフシンポジウム

日時：2019年3月27日（水）15：00～17：30
場所：京都薬科大学 愛学ホール（A31 講義室）
参加者数：117名（職員67名、大学院生5名、学部生44名、学外1名）

本キックオフシンポジウムは、平成30年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択された「受容体特異的画像化技術を基盤とするがん放射線内用療法 (radiotheranostics) 研究拠点の形成」課題の遂行にあたり、全学的な取り組みとして全ての参加者（教職員、学生）の意識の統一を図るとともに、セラノスティクスをキーワードとした新たな共同研究体制構築の契機とすることを目的として企画された。

本プロジェクトは、本学が有する優れた研究基盤を基に放射線内用療法研究拠点を構築・機能させ、本学の次世代がん研究のブランドとすることをめざす。

開会に際して、後藤直正学長から本プロジェクトの意義や本プロジェクトへの期待を開会の辞としてご挨拶いただいた。

引き続き、本プロジェクト申請の取り纏めを担当した赤路教授が、私立大学研究ブランディング事業の概要と本プロジェクトが目指す目標について説明を行った。

次に本プロジェクト学外評価者として参画いただいている京都大学 特任教授・学術研究支援室長 佐治英郎先生に「がんの内用放射線治療薬の現状と開発展望－Radiotheranostics－」と題してご講演頂いた。本講演では、セラノスティクスの基本概念の説明からラジオセラノスティクスの実際の使用例や、核医学治療薬の開発と臨床応用の現状と展望まで幅広くお話しいただいた。



後藤 直正 学長



赤路 健一 教授



佐治 英郎 先生

続いて、本学放射性同位元素研究センター准教授の河嶋秀和先生に「京都薬科大学セラノステイクス事業の展開に向けた現状」と題してご講演いただいた。本講演では、ラジオセラノステイクスに用いられる核種と現在本学で使用可能な核種についてご説明いただき、RIセンター内の機器の設置状況についてご紹介いただいた。また、現在進行中の研究内容や今後の展望についてお話しいただいた。



河嶋 秀和 先生

最後に、本学統合薬科学系教授の高田和幸先生に「アルツハイマー病の病態コントロールを目指した新たな neurotheranostics の開発にむけて」と題して講演いただいた。本講演では、アルツハイマー病の病態形成機序や治療薬の開発状況、それらの問題点について解説していただき、画像診断技術の現状とアルツハイマー病治療におけるニューロセラノステイクスの展望についてお話しいただいた。



高田 和幸 先生

いずれの講演においても、多くの質問があり、活発な議論がなされた。最後に赤路健一副学長が本プロジェクトの目指すべき方向性を確認し、閉会の辞とした。

(文責：小林数也)



会場の様子

創薬科学フロンティア研究センター特別講演会

日時：2018年8月6日(月) 16:30~17:30
 場所：京都薬科大学 南風館 N11, N12 セミナー室
 講演者：Duy H. Hua 教授 (Department of Chemistry, Kansas State University)

2018年8月6日(月)に本学南校地南風館セミナー室において、カンザス州立大学化学科教授の Duy H. Hua 先生に「Mechanism and Counteraction of Alzheimer's Disease in Mouse Models」と題してご講演いただきました。当日は本学の教職員、大学院生、学部生に加え、他大学の教職員の参加も得て盛会となりました。

講演では、Hua 先生が精力的に研究されている三環性ピロン誘導体の創製と、アルツハイマー病治療薬としての可能性について紹介していただきました。多様な構造を持つ三環性ピロン誘導体のライブラリー構築から、その *in vitro* および *in vivo* での AB 凝集阻害活性や神経保護作用など広範に渡る内容について、終始熱のこもったご講演をいただき、活発な質疑応答も行われました。



(文責：古田 巧)

2018年度創薬科学系総合薬学研究・総合薬学演習卒業論文発表会

2018年6月27日(水) 15:30~16:50まで、創薬科学フロンティア研究センターに所属する創薬科学系3分野75名(薬品化学23名、薬品製造学24名、生薬学28名)の総合薬学研究・総合薬学演習卒業論文発表会が創立130周年記念館で開催されました。



発表会場の様子

本学学生は、3年次後期から各分野に配属され、6年次前期までの間、個々の研究に取り組み、本会にて約3年間の研究成果をまとめて発表します。本発表会では、グローバル人材育成の一環として、学生全員に英語でのポスター作成・発表・質疑応答を行うことを課しています。

当日は、海外学術交流協定校であるマヒドン大学(タイ)、アレキサンドリア大学(エジプト)、国立台湾大学(台湾)、国立成功大学(台湾)、MCPHS大学(アメリカ)、カリフォルニア大学サンフランシスコ校(アメリカ)、フライブルク大学(ドイツ)、ハノイ薬科大学(ベトナム)から教員20名、学生8名を招待し、発表会に参加していただきました。

学生たちは、発表会に向けてこれまでの実験データを振り返り、ポスターを作成し、教員や院生と議論しながら準備を進めてきました。慣れない英語でのポスター作成や発表準備に戸惑うことも多かったようですが、会が始まってからは、活発な議論が繰り広げられ、活気あふれる発表会となりました。



質疑応答の様子

薬剤師国家試験に向けての勉強が本格化する前の一つの大きな区切りとして、本会は学生たちにとって自身のこれまでの研究生活を振り返る良い契機となったのではないかと思います。

(文責：小林数也)

薬品化学分野 (23名)

氏名	演題名
石沢 克康	P1'芳香環に置換基を導入したヒドロキシエチルアミン型 BACE1 阻害剤の合成と活性評価
石地 真邑	Wnt/β-カテニン経路阻害剤の設計と合成
井関 梨紗	HEA型 BACE1 阻害剤の P1'芳香環に関する構造活性相関研究
春日 真尚	レトロインベルソ型 HTLV-1 プロテアーゼ阻害剤 N 末端部分の合成研究
片畑 亮人	N-アミジノピペリジン構造を基盤とする新規低分子 BACE1 阻害剤の合成研究
加藤 真央	mono-THF 型バンレイシ科アセトゲ

	ニン、 <i>cis</i> -solamin B のピロリジンアナログの合成研究
亀田 里紗子	パラジウム触媒による立体選択的環化反応を用いた <i>ent-iso-6-spectraline</i> の合成
北嶋 太志	ヒドロキシエチルアミン型 BACE1 阻害剤に関する P1'誘導体の合成と活性評価
許 千晴	デカヒドロイソキノリン型 SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤の合成
斎藤 瑞歩	N-アミジノピペリジン骨格を有する BACE1 阻害剤の合成研究
佐田 理紗	オレフィンメタセシス反応を用いた大環状 BACE1 阻害剤の合成
島 恭平	1 位置換デカヒドロイソキノリン型 SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤の合成研究
清水 勇帆	新規相互作用部位を導入したアザ-デカリン型 SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤の合成研究
進藤 尚加	P1'位に <i>m</i> -トリル基を導入した HEA 型 BACE1 阻害剤の合成と活性評価
田窪 万由子	P1-P3 側鎖を架橋する大環状 BACE1 阻害剤の合成
田中 美咲	N-アミジノピロリジン型 BACE1 阻害剤の立体選択的合成と構造活性相関研究
萩原 瑠美	Wnt シグナル伝達経路を阻害する化合物の設計と合成
藤原 采耶花	新規相互作用部位を導入したオクタヒドロイソクロメン型 SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤の設計と合成
細谷 早希	古典的 wnt シグナル伝達経路を阻害する化合物の設計と合成
宮崎 美佳	EGF レセプター細胞外領域の二量化阻害に着目した光官能基環状ペプチドの評価
森岡 佑介	光反応基を有する EGF レセプター二量化阻害剤の合成
山中 優季	オキサ-デカリン型 SARS 3CL protease 阻害剤の設計と合成
山本 真菜	SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤を指向したアザ-デカリン型化合物の合成研究

薬品製造学分野 (24名)

氏名	演題名
青木 友郁	<i>p</i> -メトキシベンジル基を保護基としたグアノシン誘導体の合成研究
井上 暁斗	アルキンをラジカル受容体としたヨウ化サマリウムを用いる新規 2-トリフルオロメチルインドリン誘導体合成法の開発
上田 拓	<i>N</i> -メチルピラゾール環をスルホンアミドで連結したアセトゲニン誘導体の合成と抗腫瘍活性評価
大前 滯	3,5-ジカルボニル- α -ピロン体の合成研究-I-
金本 惇史郎	エチレングリコール単位を導入したアセトゲニンチオフェン誘導体の合成研究
木下 七海	エチレングリコール単位を導入したアセトゲニンチオフェン誘導体の合成研究
小畑 久美	アルキンをラジカル受容体としたヨウ化サマリウムを用いる新規 2-トリフルオロメチルインドリン誘導体合成法の開発
田邊 佑樹	構造活性相関研究のためのヒガンバナアルカロイドおよびその誘導体合成
田村 雄太	ワンポット反応により合成した光学活性オキサゾリジノン誘導体の絶対配置の決定
道三 亮満	C34- <i>epi</i> solamin の全合成研究
利光 博至	ワンポット反応により合成した光学活性オキサゾリジノン誘導体の絶対配置の決定
長田 礼	<i>p</i> -メトキシベンジル基を保護基としたグアノシン誘導体の合成研究
夏目 若菜	酸化剤を必要としない isoquinoline <i>N</i> -oxide 誘導体の合成
平井 優里	3,5-ジカルボニル- α -ピロン体の合成研究-II-
平田 健人	3,5-ジカルボニル- α -ピロン体の合成研究-III-
平田 優里	5,6-二置換-3-アルコキシカルボニル- α -ピロン体とオレフィンの[2+2]光環化付加反応
藤井 絵里	<i>N</i> -メチルピラゾール環をスルホンア

	ミドで連結したアセトゲニン誘導体の合成と抗腫瘍活性評価
藤井 真人	エチレングリコール単位を導入したアセトゲニンチオフェン誘導体の合成研究
古川 歩実	decahydro-4a-methyl-2-naphthalenol 誘導体のビナフチル型 CD 発色試薬による絶対立体配置の決定について
森木 和也	糖尿病患者の生体内でメイラード反応により生成するテトラヒドロピリジン誘導体の合成研究
山中 三佳	酸化剤を必要としない isoquinoline <i>N</i> -oxide 誘導体の合成
山西 涼菜	シクロブタン環が縮環したテトラヒドロクマリン誘導体のメチリドを用いた骨格変換反応
山本 詩緒	多発性嚢胞腎の新規治療法の開発を指向したベンゾイソフランオン誘導体の合成研究
吉川 友理	当帰成分(<i>Z</i> -butylidenephthalide 誘導体の合成研究

生薬学分野 (28名)

氏名	演題名
岩本 拓也	ヒュウガトウキ (<i>Angelica furcijuga</i>) の膀胱筋弛緩作用
植村 紗也	アーティチョーク (<i>Cynara scolymus</i> L.) 葉部含有成分の iNOS 産生抑制作用
宇野 京	延命草抽出物のがん細胞浸潤抑制作用とその機序
太田 綾子	ポリスチレンビーズを用いた eEF2 および cofilin タンパク質の回収
奥山 優希	甘茶 (<i>Hydrangea Dulcis Folium</i>) 含有成分の 3T3-L1 細胞における p-PPAR γ 発現量への影響
笠 詩織	ハス (<i>Nelumbo nucifera</i>) 花部含有アルカロイドの神経様分化促進作用
門 麻衣子	アマチャ (<i>Hydrangea macrophylla</i> var. <i>thunbergii</i>) の採取時期による糖尿病合併症予防作用成分の比較
河村 友惟	甘茶 (<i>Hydrangea Dulcis Folium</i>) 含有成分および誘導体のコラーゲン生成抑制作用
岸本 真里子	ヘンナ (<i>Lawsonia inermis</i>) 枝部のが

	ん細胞浸潤抑制作用様式
栗木 菜津美	キンモクセイ (<i>Osmanthus fragrans</i> var. <i>aurantiacus</i>) 花部含有成分誘導体のメラニン生成抑制作用
小堀 葉奈	ハス (<i>Nelumbo nucifera</i>) 花部の 3T3-L1 細胞における p-PPAR γ 発現に与える影響
島田 あつみ	甘茶 (<i>Hydrangeae Dulcis Folium</i>) 由来イソクマリン誘導体のアルドースレダクターゼ阻害作用
富永 杏子	Ginsenoside 類のヒト皮膚繊維芽細胞におけるコラーゲン生成促進作用
野村 奈未	ワサビノキ (<i>Moringa oleifera</i>) 葉含有成分による NCI-H716 細胞からの GLP-1 分泌に与える影響
藤野 加奈恵	Ginsenoside 類のメラニン生成促進作用と抑制作用
古川 葉奈	放射線暴露による細胞障害に対する甘茶 (<i>Hydrangea Dulcis Folium</i>) 成分および類縁化合物の防護作用
増本 優介	Amyloid β (A β) ₄₂ の神経様分化抑制作用および分化促進物質による改善作用
村上 穂波	アーティチョーク (<i>Cynara scolymus</i> L.) 葉部含有成分の炎症抑制作用様式
金加 愛海	九条ねぎ (<i>Allium fistulosum</i> 'Kujou') からのテトラヒドロチオフェン骨格を有する新規化合物の探索研究
齋藤 菜月	ニゲラ属植物クロタネソウ (<i>Nigella damascena</i> , 種子) 含有ジテルペン成分の探索研究
柴田 かおり	ヘンナの部位別含有成分量と HT1080 細胞浸潤抑制作用の関連性
田中 葵	トリテルペンの 3 位立体配置に着目した誘導体合成および一酸化窒素 (NO) 産生抑制作用
中川 涼太	九条ねぎ (<i>Allium fistulosum</i> 'Kujou') からの多環式新規含硫黄化合物の探索
中村 結有	ヘンナ (<i>Lawsonia inermis</i>) の部位別成分含有量の比較と神経細胞様分化促進作用
松村 桐子	茶花 (<i>Camellia sinensis</i> , 花部) 由来アシル化トリテルペンの抗 HSV-1 作用
宮之脇 翔太	アカネ科アカネ (<i>Rubia Argv</i>) およびセイヨウアカネ (<i>R. tinctorum</i>) の主要アントラキノン類の定性・定量分

	析とそれらの生体機能性
水野 由貴	柴胡加竜骨牡蠣湯により生じた薬剤性肺炎に関する検討
山部 莉穂	オキサリプラチンによる末梢神経障害に対する牛車腎気丸の効果

新任のご挨拶

創薬科学系 薬化学分野 教授 古田 巧



この度、平成 30 年 4 月 1 日付で薬化学分野を担当させて頂くこととなりました。私は平成 5 年に岡山大学薬学部を卒業後、同大学院薬学研究科に進学し修士課程を修了いたしました。その後、京都大学大学院薬学研究科博士後期課程に進学し、富士薫先生のもと博士(薬学)の学位を取得しました。奈良先端科学技術大学院大学、米国コロンビア大学で博士研究員として研鑽を積み、平成 13 年より静岡県立大学薬学部助手、平成 20 年より京都大学化学研究所准教授として教育、研究に携わってきました。

これまで有機化学を基盤とする様々な研究を行ってきましたが、本学では従来の有機合成法を大きく進歩させる触媒反応の開発を中心に研究に取り組みます。特に、類似の反応性を持つ複数の官能基や基質を触媒でいかに見分けることができるか、に興味を持っています。もし上手に見分けることができれば、複数の反応点の中で所望の場所のみ反応させる、さらには多種類の基質の混合物から一挙に望みの化合物を合成できる、大変効率的な方法が開発できると考えています。この取り組みを通し、効率的な医薬品合成法の提案、医薬のシードとなる生物活性物質の創出を行います。

有機化学の学問的な本質は「分子の振る舞いを探求すること」にあります。これは薬が生体に対していかに振る舞うかを学び探求する薬学の本質そのものであり、薬学での有機化学の重要性は論を待ちません。講義や研究を通してその重要性や面白さを伝え、有機化学の素養豊かな薬剤師、並びに優れた有機合成化学者の育成に微力を尽くす所存です。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

創薬科学系 薬化学分野

助教 浜田翔平



この度、平成30年7月1日付で薬化学分野の助教に着任いたしました。私は平成20年に名古屋市立大学薬学部を卒業後、同大学院薬学研究科に進学し、博士前期課程を修了いたしました。その後、京都大学大学院薬学研究科博士後期課程に進学し、川端猛夫教授のご指導の下、平成25年に博士号を取得いたしました。また、学位取得後は科研製薬株式会社にて約5年間勤務いたしました。

博士後期課程においては新規酸化触媒の開発研究に、科研製薬株式会社ではメディシナルケミストとして創薬研究に従事しました。今後はこれまでの経験を活かし、生理活性物質や医薬品の効率的合成に寄与する触媒反応の創出を行いたいと考えております。

本学での業務が教員としての初めての活動となります。多くの方々から日々学ぶことばかりですが、幅広い分野で活躍するファーマシスト・サイエンティストの輩出に貢献できるよう尽力いたします。皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

共同利用機器センター

助教 安東友繁



この度、平成31年1月1日付で共同利用機器センターの助教に着任致しました。私は、平成25年に関西大学化学生命工学部を卒業後、大阪大学大学院理学研究科に進学し、高尾敏文教授（蛋白質研究所）のご指導の下、質量分析法を用いたタンパク質複合体の化学量論解析に関する研究を行い、平成30年3月に博士（理学）の学位を取得致しました。学位取得後は、蛋白質研究所にて博士研究員として、質量分析による生体試料を用いた癌の早期診断のためのバイオマーカー探索に関する研究に従事しておりました。

本学では、微力ではございますがこれまでの経験を活かし、主に質量分析計の管理・運営を行うとともに、教育・研究においてもファーマシスト・サイエンティストの育成に尽力する所存でございます。皆様方のご指導とご鞭撻をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

課程博士学位記授与者

《薬学専攻》

○大西 康司（薬品化学分野）2019年3月16日授与
【学位論文題目】2価パラジウム触媒を用いる立体選択的環化反応を利用した縮環型 SARS 3CL プロテアーゼ阻害剤の合成と評価

○深谷 匡（生薬学分野）2019年3月16日授与
【学位論文題目】*Allium* 属植物ネギ、アサツキを素材とした環状含硫黄化合物の探索研究

《薬科学専攻》

○王 巍程（生薬学分野）2019年3月16日授与
【学位論文題目】*Cassia auriculata* 種子含有アントラセノン二量体の *microphthalmia* 関連転写因子を介したメラノーマ細胞に対する増殖抑制作用

課程によらない博士学位記授与者

○山岡 長寿（薬品製造学分野）2019年3月16日授与
【学位論文題目】プラスミノゲンアクチベーターインヒビター-1 阻害作用を有する新規 *N*-アシルアントラニル酸誘導体の合成と構造活性相関研究

○森脇 浩樹（薬品化学分野）2019年3月16日授与
【学位論文題目】新規な Ni(II) 錯体を利用する α -アミノ酸の実用的かつ高立体選択的合成法の開発

ポストドクター・研究員在籍状況

ポストドクターの在籍

2018年度在籍なし

研究員の在籍

○小川 慶子（生薬学分野）

2018年4月～2019年3月

○尾田 好美（生薬学分野）

2018年4月～現在

○Ramesh Yella（薬化学分野）

2018年7月～2019年1月

FRONTIER NEWS No. 32

2019年3月 編集・発行

京都薬科大学創薬科学フロンティア研究センター

〒607-8412 京都市山科区御陵四丁野町1番地

TEL : 075-595-4635, Fax : 075-591-9900